



昭和五十五年十一月
第一二四二号

54

関野 克：4

8

西山松之助：25

三隅 治雄……31

3.

4.

15

51

山崎
正和
57

•

39

77

41

24

生

生涯教育と文化

大阪大学教授
中央教育審議会委員

山崎正和

なぜ“文化”が注目されるのか

生涯教育、あるいは社会教育、さらには文化行政という言葉が一種の流行のようになってからも、もうだいぶ月日経っておりま。しかしながら、一体なぜそれが今の時点で、特に強調されなければならないのかという理論的な説明は、意外に整理されていないようです。断片的にいろいろな考え方が出てきていますし、また文部省の中央教育

審議会でも前期の審議会では、文化と地域社会に関する答申を出して、その中で文化行政の必要性というものを一般的には説いております。

しかしながら、いざ実際の問題に触れ、現実と取り組んでみると、改めて我々が、なぜとりわけて今、社会教育を考え、文化行政を考えなければならないのかという点について、もう一つ詰めが足りないように思われます。特にこの問題に関して、公共的な努力がなぜ必要なのか。国及び地方自治体の行政がこの問題になぜ特に関与しなければならないのかという問題が、若干はあいまいなまま残されているような気がいたします。そこで、今日はこの問題を、

皆様とご一緒に考えていきたいと思っております。

一般に、生涯教育とか社会教育が必要だと言われる場合の理由として、例えば日本人の平均寿命が延びつつある、従って自己研鑽の意欲を持つ時期が延びている、ということが挙げられます。あるいはまた、経済の一応の充足の結果、人々の欲望が単なる物質的満足から、より精神的なもの、情緒的なものの方向へ変わってきているというようなことも指摘されます。さらに、職場あるいは家庭でも、いわゆる余暇というものが増えて、その余暇をできるだけ建設的な方向へ振り向けたいという意欲が高まっている。また別の観点から、社会が非常に激しく急速に変化する中で、技術の面でも職業的な能力の点でも、そうした変化に追いつくために自己再教育をしたいという気持ちが強まっている。こういう説明がなされているわけで、そうした要求がある以上は、行政はこれに応えなければならぬというものが、今日一般に広がっている理解だと言えましょう。これらはすべて正しいのですが、しかしこうした要件、寿命の延びとか余暇の増大とか、あるいは個人的な自己研鑽への欲求というものは、それだけでは生涯教育、文化行政の絶対的な必要条件にならないように思われます。なぜかと言いますと、こういう要求だけなら、それは本来、国民一人ひとりが個人の努力によって満たすべきものであり

ますし、また満たすことのできるものだからであります。簡単に言えば、老後の楽しみを得なければ、自分で本屋へ行って本を買って読めばいいのですし、ベランダでアサガオを栽培しても、山歩きをしてもいいわけです。家庭の主婦の余暇もまた、それぞれ個人の創意によって満たすことができます。さらに、職業上の要求ということになれば、これはそれぞれ個人の生活の問題と結び付いているのですから、基本的には自分の生活を守る義務は国民個人にあるということになってまいります。

もちろんそういう分野でも、公共機関、行政主体がそれを補助していく、環境をつくり助けていくということは必要でしょうし、その意味で、ある程度の関与はしなければならぬのですが、しかし、これを新しい文化行政と呼ぶにはいささか根拠が薄弱であるように思われます。しかも、こうした個人の要求を満たすことが唯一の目的であるとすれば、むしろそういった分野は個人の自由に任せるべきであり、行政が関与して余計な干渉はすべきでない、という議論もまた反対に芽生えてくる可能性があるわけです。従って、今、こと新しく文化行政の必要を問題にする場合には、もう少し別の観点からその意味と根拠を考え直す必要があるように思われます。

地域の時代、文化の時代の到来

私の見ますところでは、今挙げたような、さまざまな個人的な要求あるいは個人的な生活状況の変化に加えて、日本は今、社会全体がもう一つの意味で大きな変化の時期にさしかかっていると思います。すなわち、個人の生活が変わっていくだけではなくて、人間と人間のつながり方、交渉の持ち方、共同して住むその住み方、言い換えれば社会的関係そのものが、目立たない形ではありますが、実は深いところで変わりつつある、というふうに言えそうです。

それは二つの点から言えるのであって、そのそれぞれに分かりやすい名前を付けてしまえば、一つは「地域の時代」と呼ばれるものの到来であり、もう一つは、いわゆる「文化の時代」の到来だと言えましょう。この二つの言葉は、いずれも前の総理大臣が初めて思いつかれたように理解されていますけれども、それがこんなにも早く流行した理由を考えると、実は総理大臣がそういう言葉を口にされる前に、国民はそれぞれある変化を感じていたのであって、た

またそれぞれに総理大臣が適切な名前を与えられたということにすぎないように思われます。

まず、地域の時代でありますけれども、これについては現象の面ではかねてからみんなが感じていたことであります。青年がＪターンという現象を起こして、東京から、あるいは関西から、もって地域に密着した中小都市へ帰りつつあるということは、かねてから指摘されておりました。帰ったそれぞれの地域において、青年会議所とか、あるいはさまざまな民間団体の地域奉仕の活動が年々盛んになっていることは、これまた多くのジャーナリズムが指摘しております。

さらに公共の側から言いますが、地域の教育委員会が行ういろいろな文化的なサービス——講演会とか、市民大衆講座というようなものが開かれますと、そこへ集まる人々が急速に増えています。また、これもつとに指摘されていることでありますが、地域紙、新聞の地方紙がかなり伸びております。そのほかにここ数年特に顕著な現象は、いわゆるタウンマガジンと呼ばれる新しい形のジャーナリズムの興隆で、それぞれの町あるいは県程度を単位にして、その地域特有の雑誌が生まれ、それが相当に読まれているということです。ある新聞の調査によりますと、現在、タウンマガジンと呼ばれる雑誌は全国に五百種類、総発行部

数は月に四百万部と言われています。

このように、人々が地域へ関心を移している、あるいはそこで積極的に住もうとしている、という現象が指摘されているわけですが、その中身もまたかなり顕著な変化をみせております。ご承知のように、従来、地域社会ということが問題になる場合は、だいたい経済か、あるいは政治を中心に問題にされるかのいずれかでありました。概して企業及び中央政府は、地域社会の開発を経済の観点から考え、いわゆる新産業都市の開発を頂点として、物質的な観点からさまざまな地域開発を推し進めてきました。それに対して、いわゆる革新を名乗る人たちは、地域の問題を極めて政治的にとらえて、ひところ革新自治体というものが全国に広がった時期があったわけです。それぞれの功罪について、ここで私は論じる時間的余裕がありませんけれども、今、重点はその二つから大きく別の領域に移りつつあります。そしてそれが文化なのであります。

経済、政治から文化中心へ

大変分かりやすい例としまして、先ほどお話ししたタウ

ンマガジンの編集方針をみると明らかですが、たいいていの雑誌が集中的に取り上げているものは、いわゆる狭い意味の住民の生活要求ではないのです。どこへ行ったら安い物を買っているとか、どこへ行けば住み心地のいい住宅があるとかいうようなことはほとんど話題になっておりません。のみならず、地域で起こっているいろいろな政治的係争事件というようなものも、全くと言っていいくらい話題になっていないのです。

その代わりに何が出てくるかと言いますと、例えば、四国の松山で出ている「まつやま」という雑誌を例に挙げると、松山市内にある美容院の経営者の列伝が並んでいて、ヘアデザイナーの芸術的、文化的活動が紹介されているわけです。あるいは別の号をみますと、その町の商店が出しているショッピングバックのデザインのコンテスト、というようなものが巻頭に載っている。ページをめくるにつれて出てくるものは、若者の愛好する音楽の情報であり、あるいは旅の情報であり、デートの場所の情報であるというようなものが中心になってきており、広義の文化的状況というものが紙面を埋めています。現実には、この「まつやま」という雑誌の編集長が語っているところによりみますと、現在タウンマガジンの経営政策上避けなければならぬ第一のものは政治である、ということになっていきます。

これは大変大きな変化であらうかと思えます。

実際、Ｊターン現象が起こっている地方の中小都市の現在の状況をみましても、そこにこれまで比べて、かなり文化的な潤いがよみがえってきているということです。文化的潤いというのは大変広いものであって、もちろん地域の伝統に根ざしたさまざまな文化財の発掘や保存、あるいはもっと俗に言えば、盛り場がきれいになって、コーヒーショップから最新流行の洋服類を売っている店、あるいは駅前広場の美化、というようなことがどんどん進んでいて、東京のインテリからみますと、何となく日本全国が東京のミニチュア版になりつつあるというような現象が起こっています。その功罪は別としまして、ともかくもそうした地方の町で文化的にぎやかさ、潤いというものが、青年を引きつけていることは間違いないのであります。

端的な例を挙げますと、岡山県の倉敷という町は、私が学生のころは、あそこ有名な大原美術館に行つて疲れてコーヒーを飲もうと思つても、喫茶店が一軒もありませんでした。コーヒーというものはうどん屋さんで売っていたものです。それが、二十数年たった今日、倉敷という町はもはやコーヒーの町であり、全国的に有名な喫茶店が一〇軒も二〇軒もある、というような状況になりつつあります。これはもちろん特殊な例であります、多かれ少なか

れ、地域社会、地方都市というものは、国際的な、あるいは全国的な文化的洗礼を受けつつあるわけです。これは単なる流行ではない、と私は考えております。

多元化した生活目標

ところで地域の時代というのは、理論的には一体どういうことなのかと言いますと、その社会的な意味は二つあるように思われます。

第一は、明らかに国家中心主義、あるいは国家唯一主義といいますが、そういう国民意識の在り方の変化であります。言うまでもないことですが、現在、人類社会において国家が果たしている役割というのは、毛頭否定することはできませんし、国際的な平和、協調というものを保つていくためにも、国家というものが果たす役割は今後むしろ増えるのではないかと思います。しかし、国民一人ひとりの立場から考えて、国家的な規模でものを考えること、ものを感ずること、それだけが生活の目標であった時代は、終わりのつつあるわけです。分かりやすく言ってしまうと、GNP至上主義の時代は終わりのつつあるということです。

高度経済成長というのは、日本が国家単位で打ち出した目標であって、それを我々個人も何らかの意味において分け持ち、背負ってきたわけです。国全体のGNPの倍増ということは各家庭の家計の倍増につながっていたわけで、いわば国全部が同じことを考え、同じ方向に向かって走ってきたのでありますが、今やそういう算術的な経済の伸びというものが期待できなくなりました。少なくともGNPを至上の目的として西欧先進諸国を追い越すというような単純な目標は、我々の生活を導く力を持たなくなりました。そうなったときに、我々国民は何も目標なしに暮らすわけにはいかない。もう少し身近な、もう少し多面的な具体的目的を捜して生きることになったわけです。そして、その際の目標というものが、それぞれの地域単位に考えられるようになってきたのであります。

国を挙げて万国博、あるいはオリンピックに熱中した時代もあったわけですが、今やそういう時代ではなくなりました。むしろ、博覧会といっても、例えば今神戸で準備されておりますポートピアなどという、地域の博覧会に関心が移ってきていますし、オリンピックとともに、地域のいろいろな形の体育大会に関心が移ってきています。そういった行事以外にも、それぞれ地域をよくするための提案というものは、ある意味では無尽蔵に掘り出せる目的であっ

て、そこへ少なくとも五割ないし六割の国民意識が向けかえられている、というふうにみる事ができます。これが一つの転換であって、いわば国民意識が大きい方から小さい方へと向かって動いているということでありま

タコつぼの生活からの脱却

同時に、これとは全く裏腹に、国民の意識は、今や小さい方から大きい方へ向かって動いているのであります。それはどういふことかと言え、大変皮肉な現象ではあります。かつて六〇年代から七〇年代の初めにかけて、我々がGNP至上主義で暮らしていた時期には、実際の生活の面では、逆にタコつぼの中にもぐり込んで暮らしていたからです。タコつぼとは、言うまでもなく、マイホームという言葉に象徴される極めて狭い私的な空間であって、みんなが自分の小さな2DKに住んで、男たちは職場に出なければ自分の勤め先に立てこもり、それぞれの狭い世界の利益を最優先して考え、そしてマイホームとマイ企業との間をマイカーで通勤する、というのがこれまでの生活でありました。そして、このタコつぼの底へもぐりながら、国

民はそれぞれの屋根の上にテレビのアンテナを突き出して、そこからわずかな情報を得ていたのであります。

テレビというものはまことに象徴的な存在で、一方では国家規模で同じ情報を刻々と流していく。国民規模で一つの同じ問題に注意を向けることを要求するわけで、その意味においてはまさに六〇年代的時代の象徴であります。ところが一方、情報の受け止め手の方からみると、テレビというものは完全にタコつぼの中で鑑賞されるようにできていて、例えば、一人の子どもがテレビの漫画の前でどんなに楽しく笑っていても、その同じ瞬間に隣の子どもがどういう顔をしているかということ、決してみることができない。本来、人間は楽しいものを一緒に見て、一緒に笑うという生活をしてきたはずであり、そういう要求を持っているはずであります。テレビというのはそのような機能を持たない。考えてみれば、国民全部が同じものをみながら、それぞれ孤独に笑っている、というのがこれまでの状況であります。

また、家庭の主婦たちも同様でありまして、現在もまだ尾を引いていますが、六〇年代から七〇年代にかけて、インテリアというものに対して非常に強い関心を示してきました。インテリアというのは家具であり、壁紙であり、カーテンであり、マイホームの内側をきれいに飾るものであ

ります。従って町々にはインテリアショップというものがあふれていますが、どこを見回してもエクステリアショップというものはありません。家の外側を美しくすることについての感覚は、おそらく日本の歴史はじまって以来最低の状態にあるのではないかと思います。家の中をきれいに飾り、掃除をし、自分の子どもを厳しくしつけている母親や主婦であっても、家の外には平気で人前にみせたくないような下着を干し、ごみの入ったポリバケツをベランダに並べ、そして隣の子どもが悪いことをしていても叱らないというのが、今日の日本人の在り方です。

そういう意味で、みんながそれぞれタコつぼの中に入って暮らしてきたのでありますが、それが日本の社会というもののかかなりいびつなものにしてみました。考えてみますと、日本は企業あるいは官庁、あるいは学校という場所においては、国際的にみれば相当に誇るべき成果を挙げております。また、個々の家庭の中に限って言えば、世界的にみてむしろ誇るべき成果を挙げていると言えるでしょう。

しかし一方、例えば都会というものを物理的なためてみますと、表面に表われたことだけをみても分かるとおり、どことなく乱雑であり、どことなく品がなく、かつて公衆道徳と言われていたような部分に大きな落ち込みがみられます。日本人同士は何となく不気嫌な顔をして、世界

的にも社交下手をもって有名になっている。例えば、我々の付き合ひというものを考えてみても、その範囲は非常に限られています、主婦であれば向こう三軒両隣と親類縁者を除けば、学校の同窓会というのが唯一の社交の場所であり、男について言えば、職場の同僚と酒を飲むのが唯一の社交の場であり、たまに昔の同窓生と旅行をするぐらいが落ちであります。つまり、日本人は顔見知りとししか付き合っていないのであって、知らない人と交渉する、知らない人と和やかに付き合うということは極めて下手であります。従って電車の中ではぎすぎすしているし、盛り場は常にごみ捨て場同様になるという結果を引き起こしているわけです。

しかしながら、今、時代はそういう状況から変わりつつあります。少しはマイホームから首を出して、テレビ情報ではない本物の、生の情報を得ようとして、主婦の人たちが市民大学講座に通うようになり、男も職場の付き合いだけではこと足りなくなつて、いろいろな地域の活動にも顔を出し、あるいはスポーツクラブに顔を出すようになる、といった現象が芽生えてきています。これはまさに小さい方から大きい方への転換であります。

すなわち、一方に国家があり、他方にマイホームのタコ、つばがある極端な状況から、今、真中のところへ、つまり

は人間がお互いの顔の見える場所へやってきて、もう少し直接的な人間の交渉を持ちながら暮らしていこうではないか、という時代が来つつあります。これが、地域の時代というものの本当の意味であろうと私は思います。

“本物”“生”の文化を求める

また、おりから文化の時代ということが言われているわけですが、考えてみれば、一般的に文化の時代などというのはおかしい言いかたであつて、人類の歴史がある限り、文化というものと縁が切れたことはないわけですし、また縁を切ることは不可能であります。そこで今、とりわけて文化の時代と言われているのは一体どういう意味かと言いますと、それは文化の供給の仕方、あるいは文化的サービスの供給の仕方が、歴史的にみて、かなり大きく変わりつつあるということかと思われれます。

非常に大ざっぱに言ひまして、文化的サービスの供給の仕方には歴史上、三段階があると言えそうです。ごく初期の段階は、ほんの一握りの少数の人たちが、多数の人々から文化的サービスを受けていたわけで、社会の大多数の人

々は、文化的サービスから縁が遠かった。しかし、その時代には供給されている文化的サービスは全て本物であり、いわば生で与えられていたものでした。例えば教育というのは、ルネッサンスの西洋でもそうでありましたし、封建時代の日本でもそうでありましたが、何人かの優秀な家庭教師が、貴族あるいは支配者の家庭に入入りして手書きの本を読んで、子どもに直接教えたわけでした。着る物も本物の裁縫師が目の前で作つてそれを偉い人に差し上げたわけだし、おいしい料理にしても同様でありました。

ところが、やがて世の中が変わつてきまして、文化的サービスというものの供給の範囲が広がり、より多くの人々がそれに浴するようになってきます。もちろんその背景には経済的条件の変化というものがありません。しかし、文化的なサービスを大多数の人に与えることはなかなか難しい問題で、本物あるいは生のサービスを配ることは、ほとんど不可能です。そこでどうしたかといふと、複製の時代が始まったわけです。生身の家庭教師がそれぞれの偉い人の家庭を訪問する代わりに、考えていることを本に書き、それを印刷して配る。家来が国中駆け回つて情報を集めてご注進という代わりに、新聞というものがその情報を大量に複製して、みんなに配るようになりました。演劇というのはお金がかかりますから、これもやがてコピーをす

ることになり、映画というものができて、大量の人が楽しむようになった。やがて、さらにそのまた複製であるテレビというものがますます文化的供給の範囲を広げました。着る物についても、オート・クチュールなどといっている少数の人にしか与えられませんでしたから、デザインだけ買ひ取つて、機械で大量に生産して売る会社がでてきます。その結果、我々は最新流行の、しかしみんな同じスタイルの洋服を着て歩くようになったのであります。食べ物についても同様で、従来なら高級ホテルでごく少数の人にだけ供給していた同じ味のものを、冷凍食品にして大量に配るということが可能になります。それが今や極限まできているのであります。

そのようにして文化的サービスの味を覚えた大多数の国民は、今度はその上に立つて本物を求めつつあります。これが第三段階目であります。これはいろいろ事例を挙げることでありますが、例えば、ひところ大変売っていた美術全集というものが、最近はいくらも売れなくなりました。その代わり今ひそかに流行しつつあるのが版画です。版画というのは、一面において大量生産であつて、一枚の原画から数百枚の絵をつくることができます。しかしこれはまだ完全な複製ではありません。画家本人がこれを刷っている。他人に刷らせた場合でも少なくともサインは自分の手でし

ているからです。そこには手づくりの味が残っており、生のサービス、直接のサービスという印象を強く与えております。

また、冷凍食品というものが普及した結果、人々は今度はレストランに行きたくなくなりました。この要求にこたえて、今やファミリーレストランというものが日本中で大繁盛しています。ご承知のように、あのファミリーレストランで提供している料理というのは、冷凍食品なのであって、大工場で大量に作って、同じ名前のチェーンレストランに夜中にトラックで運んで、店先ではそれを解かして食べさせているだけなのです。しかし、少なくともウェートレスがお皿に載せて、テーブルまで運んでくれますので、ただの冷凍食品よりはやや生のサービスという印象がいたします。

そういった本物へ、生へという要求は、もっと狭義の文化の領域にも表われています。もちろん、一方ではテレビも出版も盛んでありますが、同時に、いわゆる教養講座、市民大学などといった集まりが盛んになってきており、ここでは、かつてならば活字を通してしか知らなかった著者を直接その場所と呼んで生のサービスを受けるといふようになってきております。

ります。この第三段目が、現在語られているいわゆる「文化の時代」だと私は考えております。

地域の時代Ⅱ文化の時代

そうしますと、先ほど来申し上げている「地域の時代」と、この「文化の時代」というのは、必然的に重なってこざるをえません。大平総理は、たまたま「地域の時代」及び「文化の時代」ということを、それぞれ別個に発言されたのでありますが、よく考えてみますと、地域の時代はまさに文化の時代で、文化の時代はまさに地域の時代でなければならぬことが分かります。

なぜかと言いますと、大量の複製を国民に供給している段階では、その供給源というものは一元的であり、中心に一つあればいいわけです。純理論的に言えば、冷凍食品をトラックで運んで、各家庭の冷蔵庫に送り込むのであれば、どこかに巨大な工場が一つあって、あとは高速道路があれば済むのであります。全家庭にテレビで教養から娯楽までの情報を与えようと考えれば、テレビ局は一つあって、あとは中継局があれば足ります。出版社にしても東京

サービスを相互に交換

おもしろいことに、ある経済新聞の調査によりますと、「より良いサービスを受けられるのであれば、代価は若干高くてもいい」という主婦が増えてきているそうです。お金がかかるから、そういう人たちは一体どうい生活をしているのかと思って調べてみますと、たいいていの人がアルバイトをしています。例えば、昔だと特権階級の楽しみであった乗馬クラブ、あるいはテニスクラブなどといったところにはたくさん主婦が集まっていますが、中には例のファミリーレストランへ行って皿洗いをしてそこで得たお金でそういうところへ行つて、今度は自分がサービスを受けている人がいるようです。あるいはファミリーレストランではお客である人が、他方では趣味の会の先生であるといふことも大いにありうるわけです。つまり、国民は相互に直接的サービスを交換し始めたということであつて、国民がお互いに生のサービスを交換するといふ、非常に巧妙な方法で、大多数の人々に生のサービスを提供するといふ、かつて考えられなかったことを今やろうとしているのであ

に集中していればそれで済んだわけです。実際に従来はそういう形で中央集中化ということが進んできて、東京がますます大きくなり、地方がやせるといふ現象がみられたわけです。

しかし、国民が生サービスを求めるといふことになりましたと、その供給源は、それ自体多元的に、各地域の中にバラまかざるをえません。冷凍食品の工場は一つで済みますが、ファミリーレストランは各地域にあって、人々が身近に利用できなければなりません。テレビ局は一つで済みますが、劇場は一つでは済まない。市民大学講座というものも各地域に必要になってきます。

と同時に、先ほど申し上げたように、今や地域の結節点と言いますか、地域の人々が集まるつながりが、政治や経済ではなくて、広義の文化的サービスを求めることに変わってきています。その両面からみて、地域と文化というものは、まさに重なり合うのでありまして、その点に実は、行政の仕事が入ってくるわけです。つまり、一人ひとりの人間が、自己の向上のために家で勉強しているというだけのことならば、まだ行政の任務は軽いのですが、地域というものが文化の発展にとって絶対的な条件になりつつある現代、その地域の整備を行うのは、これは行政以外にないのであります。

地域と文化政策

そこで、地域と文化政策ということが問題になるのですが、これは今後、行政にとっては従来考えられなかったほど大きな比重を占める、ということをお願いしたいのであります。これまでどちらかというと、文化というものは行政になじまないもの、あるいは行政の中でも周辺の部分なのだ、というように考えられてきました。それは、全て文化というものが、単なる個人の楽しみ、あるいは私的な自己研鑽の対象だというふうに誤解されてきたからです。そういうものであれば行政は干渉しない方がいいわけですし、せいぜい端役で済みます。しかし、これからは地域を組織していくこと、あるいは地域をまとめていくこと、そのための仕事の中心に文化がある、ということになってきたのですから、文化行政は端役どころの話ではないのであります。

もう一つ申し上げておきたいことは、現在の日本の文化の状況、在り方というものが、良かれ悪しかれ、過去の行政の産物なのだという事です。これは、かつて行政が文

化と関係がなかったからではなく、むしろ関係のないような顔をしながら、大いに行政は文化にかかわっていた、その結果が今に残っているということです。

具体例を挙げますと、学校教育であります。学校教育というのは、日本の近代化の中でもおそらく最大といってもいいくらい大きな成果を挙げています。しかし、学校教育に大量の国家予算を注ぎ込み、そこに集中的に人材を確保した結果として、学校で教えられる部分の文化というもの、は、相対的に非常に大きな遅れをみせています。もちろんそれは、これまでの日本の歩みを考えれば、仕方ないことであります。これまで日本は、ともかくも国家有為の人材を養成して、西欧先進国に追いつけ追い越せとやってきたのですから、その過程では学校教育は非常に大事で、大部分の予算を注ぎ込んでも仕方なかったことです。しかし、その過程の中で、例えば劇場、あるいは音楽会場、あるいは市民的なスポーツ施設というようなものは、諸外国に比べると相対的にかなり遅れています。

これは何も行政だけが悪いのではなくて、国民の意識もそういうふうに慣らされていきました。実はそういう伝統は江戸時代の中期あたりからもう固まってきておりまして、日本人が尊重する文化というのは学校教育と読書で、それ以外のものは何か余計なもの、つけ足しのように考えられ

てきました。それが現在、結果として現われているわけですから、その結果に対して行政が修正の手をうつのは、むしろ当然の義務だとさえ言えるでしょう。

行政の役割と新しい視点

さらに別な面から言いますと、広義の文化活動というのは、一〇〇％民間の努力に委ねておくことができないのであります。もちろん、主力となるものは民間の努力である、と私は考えていますが、民間の努力が行われるのは、あくまで利益がある場合に限られます。企業にせよ個人にせよ、報酬のないところに活動はないわけです。そういう状態にしておきますと、文化活動の多様性というものは、おのずから抑えられてしまいます。中世とか、ルネッサンスの時代ならいざ知らず、現代のように、社会活動の多くが強力な企業の手によって進められている時代になると、ますますこの偏りが大きくなります。早い話が、レコード会社やテレビ会社や、あるいは映画会社や、国民の大多数が今の時点において求めているものだけを供給します。そうしなければ利益にならないからです。現時

点では国民の少数の支持しか得られていないけれども、長い目でみれば将来の芽になるようなものに、だれが投資をするでしょうか。これは民間企業には期待できません。

文化というのは、過去の歴史を振り返ってみれば分かります。自然な競争状態におかれている場合には、放っておいても、ある時期に少数派であったものが次の時代に芽をふいて多数派になっていく、という現象が起こるのであります。しかしながら、現代のように、例えばテレビ会社が視聴率というものを非常に気にして、視聴率の高いものだけを放送するようにしますと、自由な競争状態よりもっと極端な形でひずみが生まれてきます。言い換えれば、その時代の少数派の趣味、考え方はまっ殺されてしまう危険がある。具体的に言えば、その時代の古典であり、その時代の前衛であるような文化活動というものは、非常に生きにくい状態になってきています。

簡単に申し上げますと、永井荷風という小説家がいまして、あの人が小説家として名をあげてからでも、初版本というのは一千部に満たなかったそうです。それでも生計が立ったわけですが、とにかく初版は千部の本が刷られた。つまり逆に言えば、千部刷ることができれば、本を出版することができたわけです。また、かつて劇場や音楽会でもそうでしたが、千人、二千人の人が支持していれば可

能であったいろいろな公演も、現在ではそれが難しくなっています。言い換えれば、千や二千という数はゼロに等しくなってきたというのが現状です。これにはどうしても利益とは無関係な、公共の助けというものが必要であります。

「文化活動圏」の提案

さて、その上で我々は文化行政についてどのように考えていけばいいのか、ヒントというような形で、具体的なことを二、三お話しして、結びにしたいと思います。

まず、「地域」の概念ですが、これは大きく変わります。ありますし、また変えられなければならないと考えています。本日ここにお集まりの皆様方は、それぞれの県を単位としておいでになっているかと思いますが、もはやそういうかつての自治体単位というものが、本当の地域であるかどうか、特に文化行政に関しては疑わしくなっています。現実には国民の生活をみれば分かることですが、国民は府県、あるいは市町村単位で生活していないのであります。電源はどこか遠くの県にあるし、勤め先は隣の県に、学校はまた別の町にあります。たまたに芝居や音楽を見に行くと

いうことになれば、二つか三つ町を飛び越したところまで出かけて行きます。一人の人間が、自分の営みに応じて、そのときそのときの仕事や楽しみに応じて、住んでいる地域というものを使い分けているわけです。

文化の問題は、そういう状態に即応して考えなければならぬということ、私も中央教育審議会では、「文化活動圏」という考え方を提案しました。それは通勤圏、通学圏というものと重なりながら、あるいはずれながら、しかし独自の一つの圏域を形成しているはずである。しかもそれには、日常的な小さな圏域と、文化に特有のお祭的な活動のための大きな圏域との、二重の構造で考えるべきであるという提案であります。これを、「文化活動圏」と、わざわざ活動という字を入れたことに大きな意味があるわけで、私どもは従来の「文化圏」という考え方は取り入れておりません。「文化圏」という考え方は、どうしても伝統文化を中心に想定され、固定的なものの保存にのみ意識が傾きがちになるからであります。

普遍的文化か伝統的文化か

ここで次に、文化行政を進める場合に、一体伝統文化に重点をおくべきか、あるいは現代の普遍的文化、国際的文化といったものに重点をおくべきかという、二者択一の問題がでてくるわけです。

端的に申しまして、私は普遍的文化からスタートすべきであると考えています。と言いますのは、伝統文化というのはもちろん大事にしなければなりません、そういうものにあまり大きな比重をおいていると、逆に一種の地域格差を拡大することになります。ざっくりばらんに言って、例えば古代美術につながる伝統という物差しで測れば、全国の都道府県といえども、奈良にかなうところはないわけです。奈良や京都からみれば、日本中は田舎になります。また、江戸的伝統ということで測れば、どんな物差しを持ってきても東京が中心で、ほかは全部田舎であります。その場合に、妙に片ひじを張って、地域的伝統というものに固執していくことは、私は時代に逆行していると思います。もちろん保護行政、あるいは文化財の発掘研究ということは大事ではありますが、これはすでに従来も相当の努力が払われている分野であって、それよりはむしろ、今や普遍的な文化というものに目を向けるべきで、その中から新しい伝統というものが自然にでてくるのを待つべきである、と考えております。

これには実は非常にももしろい逆説があつて、余り地域の伝統的特性に固執すると、かえってその地域は損なわれてしまふ。むしろ普遍的文化を植え付けようとする地域特性がでてくる、という皮肉な現象があります。一番分かりやすいのは、かつての旧制高等学校の配置です。旧制高等学校というのは、最初はナンバースクールでありました。ナンバースクールですから、これはむしろ普遍性が強調されて、地域性というものは無視され、そこで国際的に通用する知識というものを供給されていたはずであります。そうしたほうがかえって、熊本第五高等学校というのは何かそれらしい地域特性を持っていましたし、三高には三高らしいある気風というものがたちまちできあがりまして。皮肉なことに、各府県の名前のついている新制大学よりも、昔のナンバースクールのほうが、はるかに地域特性を持っております。

もう一つ戦後の例を挙げますと、かつてのNHKの大阪支局、すなわちBKと呼ばれる放送局は、ラジオドラマと教養番組において、日本の中でも屈指の仕事をしていた。当時、大阪のBKでは、大阪的特色を出せなどということをディレクターに要求しませんでした。例えば、ラジオドラマを書くのに大阪弁で書けなどということは、問題にもされていません。みんなが世界に通じるドラマを書

くつもりで書き、それを演出してきたのです。教養番組も同様であって、大阪の文化などということをだれも言わなかったわけで、世界の文化を考えていました。その結果、大阪では優れたディレクターがたくさんでてきました。実はあの有名な「日本史探訪」という番組を担当したスタッフは、ほとんどが大阪から東京に移った人たちだったわけです。ところが、不幸なことにNHKの方針が変わり、東京オリンピックの開催を境にして中央集中化が進みました。それにつれて大阪に要求されることは、地域的特性を発揮することということになります。すなわち、ドラマは大阪弁でなければならないし、教養番組は何か大阪の裏町の夫婦善哉風文化でなければならないということになってきます。その結果、現在のBKはかつてに比べて、はるかに生産力を落としています。

これはわずかな例ではありますが、現在それぞれ府県の教育委員会が行っている教養講座の類でも、ニーズの高いのはむしろ一般的、普遍的、国際的な教養を身につけることであって、いつまでも地方の歴史であるとか、地域の文化であるというようなことには、関心が向いていないということを知っています。

住民参加の意味

最後にもう一つ大事なことは、どうも文化行政、しかも地域を尊重するというような言い方をしますと、とかく地域住民の参加ということが問題になります。しかも、この住民参加ということが非常にしくし定規にとられていて、何もかも地域住民が自分でやらなければ文化活動ではない、というような偏見が流行しています。例えば、地域で芝居をやるということになれば、その土地のアマチュア、あるいはその土地の劇団が上演しなければならない。音楽もその土地の演奏家でなければならない。あるいはできただけたくさん住民が集まるコーラスのようなものもいいのであって、一流のピアニストの演奏会というのは行政がかかわるべきものではない、というような考え方が広がっています。私はこれは間違いだと思っています。

参加というものはもっと幅の広いものであって、むしろ一級品を鑑賞するということこそ、最大の参加であります。市民が、あるいは国民が、自分でやらなければ文化活動でないというように思い込んだ変な偏見は、私は日本の

おけいこごとの悪しき名残り、伝統だと思えます。日本には妙な伝統があつて、文化活動そのものは軽べつするくせに、文化活動をおけいこすることは大変尊敬します。早い話が、琴や三味線というものは、娘が弾くのはいいけれど、演奏されている場所に出かけるのは不届きなこととされる。もっと分かりやすい例を挙げると、我が国ではピアノが大変普及して、家庭におけるピアノ保有台数は世界一です。しかし演奏会場はどこへ行ってもがらがらであつて、日本の一流ピアニストは、西洋へ行つて稼いでいる状態です。つまり、ピアノは弾くものであつて聴くものではない、というのが我が国の考え方です。

文化行政への期待

このような傾向を行政が助長していくと、ますます逆効果であります。呼び屋と言われようが何と言われようが、それぞれの地域社会に、中央の、あるいは世界の一流のピアニストを呼んで聴かせることもまた、りっぱな市民参加である、とお考えいただきたいのです。

それから、これは中央教育審議会の答申の中でも言われ

ていることですが、ともかくも行政の中で文化を担当する人々を大事にしていく、そういう仕組みをつくるべきであるということなのです。

従来、文化行政そのものが、何となく刺身のつまであつた。そういう考え方を変えていくためには、行政機関の中で最も有能で、最も有力な人が文化行政に携わるべきでありますし、また行政機関全体が実は文化活動をやっているのだ、という認識を持つべきであります。住宅をつくるにもエクステリアの問題が入ってきますし、道路をつくるにしても、すべてデザインあるいは美観ということにかかわるわけです。すべて国民情操に深くかかわっているという認識を持って、行政を進めていただきたいと思っています。

（本稿は、昭和五十五年度関東甲信越静地区文教施策連絡協議会における講演を基にしたものです。文責＝編集部）

太田聰雨 星をみる女性

太田聰雨が昭和五年第一七回院展に出品した「浄土変」は、初入選のうえ美術院賞を受け、おおいに画壇の注目を集めた。大和国当麻寺の御堂深く、蓮糸で曼陀羅を織る中将姫を描いたその作品は、流麗な描線と清雅な色彩により、気品のある浪漫的詩情をたたえていた。それは小林古径、安田靉彦らの影響のもとに育ったこの画家の芸術の基調を示すものとなり、以後の風俗画にも引き継がれていった。「星を見る女性」は昭和九年の「種痘」に続く現代風俗画連作の一つで、昭和十一年改組帝展に出品されて文部省買い上げとなった。簡潔な描写の中に清楚な美しさを表現しており、和服の女性と現代科学という組み合わせの意外性がこの作品の発想の基にある。

しかし、組み合わせがいかに新奇で人の意表をつくものであっても、また女性がいかに美しく描かれていても、現代風俗を表現したといってみたところで、実はこうした美人画にはリアリテイがないのではないかという疑問がつきまとう。作者はこの問題に悩み、昭和十年代の中頃から次第に歴史風俗画に、さらに戦後は構成的な表現へ移り、以後大作の美人画は描かなくなった。

(岩崎吉一)

編集後記

▽近時、第三次全国総合開発計画や新経済社会七か年計画においても、国民の生活や教育、文化、福祉への視点を強めるなど、国の施策が経済中心から文化重視へと、この時代認識の転換のもとに展開されるようになってきている過程において、中央教育審議会が「地域社会と文化」の問題を取り上げ、昨年六月に答申を出したのを機に、文教行政の各分野において地域社会振興の視点がいつそう強く意識されるようになってきています。このような背景の下で、激しい人口移動、都市化の進行等々によって地域社会の姿も、住民の意識も大きく変わった後、最近社会、経済変動がやや沈静化すると、改めて伝統文化を見直し、更には地域社会再生の期待を地域の伝統文化に求めようとする傾向が、住民にも行政にも強くなってきました。

▽今月は、伝統文化の継承と今後の発展を期するための課題等を広い視野から取り上げました。建築と生活との関係から日本の住宅建築の特徴を考察した関野論文、伝統芸能における日本の文化現象である家元制度等の伝承方式について考察した西山論文などのほか、地域社会において秀れた伝統芸能や伝統工芸を支え、あるいはその継承に苦闘されている人々の状況報告なども掲載しました。

▽次号は「国際化の進展と海外子女教育」を特集します。(企画室)

MEJ 61 月刊 「文部時報」 11 月号 第1242号

著作権 所 有	文 部 省	昭和55年11月5日 印刷 昭和55年11月10日 発行
発行所 株式会社ぎょうせい 本 社 東京都中央区銀座7丁目4番12号 (郵便番号 104) (営業所) 東京都新宿区西五軒町52番地 (郵便番号 162) 電話 東京 (268) 2141 (代表) 振替口座 東京 9-161番 印刷所 株式会社 行政学会印刷所		定価 200 円 (〒33円) 年間購読料 2400 円 (〒共) ・ただし、増大号、臨時号の場合は別に代金を申し受けます ・なお、購読のお申し込みは直接営業所またはよりの書店にお願いします